

# 静岡産業大学におけるスポーツ保育の取り組み

山田悟史<sup>1)</sup> 山本新吾郎<sup>1)</sup> 小林寛道<sup>2)</sup>

## Activities to “sports child care” on Shizuoka Sangyo University.

Satoshi Yamada, Shingoro Yamamoto, Kando Kobayashi

### Abstract

The purpose of this paper is to introduce that Activities to “sports child care” on Shizuoka Sangyo University. Table of contents and overview are as follow

- I. Introduction: Introducing the over view of the whole
- II. Kids School: Introducing the exercise school for children
- III. Publication of guidebook of “sports child care”: About the back ground of guidebook publication of “sport child care”
- IV. Collaboration with municipalities and companies: About cooperation mainly Iwata city and Fujieda city.

**Keywords:** sports child care, field work, local government, practical training

### I. はじめに

2012年3月に文部科学省の幼児期運動指針策定委員会から全国の各幼稚園、保育所に「幼児期運動指針」<sup>(1)</sup>が通知された。この「幼児期運動指針」では、幼児期には遊びとしての身体運動が重要であり、その身体運動は多種多様である必要があるとして『幼児は、様々な遊びを中心に、毎日、60分以上、楽しく身体を動かすことが大切』だと述べてられている。

静岡産業大学では、それに先だって2008年からスポーツの良い面を保育および幼児教育に生かすという「スポーツ保育」の考えを提唱し、2009年にはスポーツ経営学科の中に「スポーツ保育コース」を設置、「スポーツ保育」を実践する指導者としてNPO法人幼少健康育成研究会が認定する「スポーツ保育教育士®」を養成している。

表1. 静岡産業大学スポーツ保育の沿革  
Table1. History of “sports child care” at Shizuoka Sangyo University

2006年	磐田キャンパスでキッズスクール開始
2008年	NPO法人幼少年スポーツ健康育成研究会設立
2008年	NPO法人幼少年スポーツ健康育成研究会発足記念シンポジウム『子どもを元気に育てる「スポーツ保育」の可能性と大人のかかわり』
2009年	スポーツ経営学科にスポーツ保育コースを設置
2012年	公開講座「幼児期運動指針解説」
2014年	スポーツ保育ガイドブックを出版
2014年	スポーツ保育シンポジウム開催
2014年	藤枝市においてキッズスクールを開催(2年間)

「幼児期運動指針」が通知された2012年の翌年の3月には、「スポーツ保育」を「幼児期運動指針」に基づき整理し直し、「スポーツ保育ガイドブック」<sup>(2)</sup>を発刊した。これは、幼

<sup>1)</sup> 静岡産業大学経営学部

〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

<sup>2)</sup> 静岡産業大学スポーツ医科学研究センター

〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

<sup>1)</sup> School of Management, Shizuoka Sangyo University  
1572-1, Owara, Iwata-shi, Shizuoka

<sup>2)</sup> Research Center of Sports Medical Science,  
Shizuoka Sangyo University  
1572-1, Owara, Iwata-shi, Shizuoka

児期運動指針に準拠する最初の書籍となった。

また、「スポーツ保育」を体現する場として磐田キャンパスにおいては「キッズスクール」を年間通して開催し、学外においては市町と連携した「キッズスクール」や運動遊び教室なども行っている。

さらに、「スポーツ保育」への理解と環境整備を進めるために、保育士や幼稚園教諭向けの研修・講習、スポーツ保育関連のシンポジウム、市町と連携してのイベントなど様々なものを積極的に行っている。その沿革を表1に示した。

本論では、静岡産業大学における「スポーツ保育」に関する取組を取り上げる。

## Ⅱ. キッズスクール

### 1. 磐田キャンパスのキッズスクール

本学では2006年から磐田キャンパスにおいて土曜日の午前中を使って、キッズスクールを始めた(表2)。当初はサッカー、バレーボール、体操、テニス、それぞれのスクールがあり、子どもたちはそれぞれの教室に申し込む形であった。つまり単一種目のスクールであり、それらを総称としてキッズスクールと呼んでいた。スクールでの指導に当たるのは、それぞれの部活動の部員である。つまりサッカースクールは、サッカー部の部員が指導にあたっていた。対象は小学生が中心で、スクールの内容としては、競技スポーツのジュニアスクール的なものであった。

表2. 磐田キャンパスにおけるキッズスクール  
Table2. History of kids school at Iwata Campus

2006年	磐田キャンパスでキッズスクール開始(単一種目)
2007年	複数種目を体験できるスタイルに変更
2010年	運動遊び的なものが導入
2013年	サークルを主体とした運営スタイルに変更 クラスカテゴリも変更し、定員制を採用

翌2007年から、単一種目のスクールから、複数種目のスクールへと変更された。それは子どもたちに多種多様なスポーツを経験してもらいたいという意図からである。そのため、前年は「サッカースクール」あるいは「バレーボールスクール」など個別に申し込んで

いたが、この年から「キッズスクール」に申し込む形に変わった。子どもたちは週変わりでサッカースクール、体操スクール、バレーボールスクール、テニススクールとランダムに行っていくスタイルである。指導は前年と同様、部活動の部員が行い、内容もほぼ同様のものであった。

2008年に、本学でスポーツ保育コースが設置され、それに伴い子どもの運動遊びの指導者を目指す学生が増えてきたことを受け、それらの学生が3年生になる2010年から、指導経験の場を提供しようと、前述の内容に「運動遊び」の回を加えた。指導は、子どもの運動遊びに興味がありそうな学生に教員が「やってみないか」と声をかけて集めた学生がその都度行っていた。その中で、スポーツ保育を提唱する大学としては、スポーツ保育の運動遊びを中心とした低年齢中心のスクールへの展開を検討していたが、中学年以上の小学生には競技スクール的な内容への希望者も少なからず存在し、しばらくは競技スクール的な内容の中に運動遊びを混在させるという状況が続いた。

ジュニアの競技スクールは別に開催するという動きが始め、また同時に文部科学省の幼児期運動指針の通知に伴い本学でのスポーツ保育への取組が強くなったため、2013年より、低年齢中心、運動遊び中心のキッズスクールへと仕組みも含めて大幅に変更された。そのため、指導の主体も部活動の部員ではなく筆者が「スポーツ保育サークル」を立ち上げ、そのメンバーが中心となって指導する事となった。

クラスは、年中クラス、年長・小1クラス、小2・小3クラスの3つのカテゴリーとし、初めて定員制を導入した(表3)。年中クラスは親子参加の教室としたが、その理由は、年中(およそ4~5歳)は親子のスキンシップはまだまだ大事な時期であるが、この年齢になると親子で参加出来るスクールや教室が極めて少なくなるためである。年中での親子参加は、はじめは抵抗のある保護者もいるが参加後には良かったという感想が聞かれることも少なくない<sup>(3)</sup>。年長・小1クラスは、あえてこの2学

年の複合クラスとしている。年長さんは保育園・幼稚園でお姉さん・お兄さんとして頑張っているため、たまには小学生のお姉さん・お兄さんと一緒に遊んでもらいたいという気持ちからである。反対に小学1年生の子たちには、たまにはお姉さん・お兄さんとして誇らしげに頑張ってもらいたいという気持ちである。小2・小3クラスは特に大きな意図はないが、多少学年差も少なくなっている事、だんだん自分の趣味趣向がはっきりし、競技スポーツに移る子、文化系の活動を主に行う子などが増え、参加者も自然と減る事もあり、ある程度一緒に遊べる人数を確保する意味も含めて合わせて行っている。

表3. キッズスクールのカテゴリー  
Table3. Category of kids school

年中クラス（親子）	定員25組
年長・小1クラス	定員50名
小2・小3クラス（小4以上も可）	定員50名

当初、小4以上は想定していなかったが、4年生になってもやりたいという要望が少なくなく、キッズリーダーという扱いで小数の参加を認めている。その結果中には6年生まで参加した子もいた。

ここで一つエピソードを紹介する。ある男の子が運動遊び中に足をくじいてしまったため、筆者が応急処置をしていた。そこへお母さんが「すみません、うちの子どんくさくて」と言いながら話しかけてきた。話を聞くと運動が得意でなく、体育もあまり好きではないとのことであった。いつも楽しそうに参加している子なので、不思議に思いながら「でもいつも来てくれてるね」と筆者がいうと「うん、ここは好き!」と言ってくれた。なぜなのかたずねると「サッカースクールとか、僕は上手くないから、居心地が悪いというか、、、でもここは下手でも楽しめるから」と言っていた。確かに、年齢が上がるにつれ、ただ遊ぶだけの場所は非常に限られてしまう。キッズスクールの存在意義を改めて意識したエピソードである。

定員制を採用したのは、指導の質を担保するためである。指導者としてはまだ未熟な学

生が指導するためあまりに多すぎると指導が上手く出来なくなってしまう。あるとき「少しでも多くの子どもたちに参加して欲しい」という学生の要望もあり、相談した結果定員を超えて多めに参加を認めたところ、やはり学生では対処しきれなくなってしまったことがある。学生教育のためにも、参加してくれる子たちに十分な遊びを提供するためにも人数のコントロールが必要であり、現在の所ちょうどよい人数となっている。

また、現在のキッズスクールは前述の通り、スポーツ保育サークルが主となり、年間を通して教室を安定的に開催している。講義の実習・演習も必要に応じてそこに参加する。授業用に集めた子たちではなく、スクールへの実習・演習が学内で出来ることは大きなメリットである。また、体操部やトランポリン部、バスケットボール部、バレーボール部は試合のない日やシーズンオフには、指導を主体的に担当している。そのスポーツの楽しさを広めるとともに、スポーツの楽しさや動きの本質を見つめ直すよいきっかけになっている。

その他、キッズスクールにおいて幼児体力測定などを行い、研究の場としても活用しつつ、指導へ活かしたり、参加者へ情報をフィードバックしたりなど研究機関である大学ならではの活動も行っている。

## 2. 藤枝市でのキッズスクール

藤枝市はスポーツ少年団発祥の地とも言われ、スポーツへの意識が高い。2014年の市政60周年を記念し、藤枝市にもキャンパスを置く本学と提携し、キッズスクールを開催することになった。対象は年長・小1で、親子運動遊びとして行った。指導は本学教員が行った。この年齢での親子運動遊びは、参加者がいるかどうかも含めて不安であったが、フタをあけてみれば盛況で、参加者からも「久々に親子で思いっきり笑った」という嬉しい感想も聞けた。はじめは1年だけの予定で、以前高校の体育館として使用されていた市の体育館で年6回行った。しかし、盛況であったため、市から継続して欲しいと依頼され、続ける事になったが、体育館が子ども専用の遊



図1. 藤枝市でのキッズスクール集合写真  
Figure1. Group picture of kids school at Fujieda City

び施設に改修されることになり、通常の運動遊び教室は出来なくなった。ただ、案内を出した後だったため、近くの小学校の体育館を借りて2年目を行った（図1）。藤枝市の子ども専用施設については本学も関わっている。詳細はVI項を参照されたい。

### Ⅲ. ガイドブックの出版

「スポーツ保育」はともすると誤解を招く言葉である。「スポーツ保育」ではスポーツは遊びであり、そのスポーツの良い面を保育や幼稚園教育に生かすというものである。しかし「スポーツ」という言葉から受ける印象はかなり差があり、中には「子どもの頃からオリンピックを目指してスパルタ教育をすべきということか」と比較的強めの語気で問われることもしばしばある。これは「スポーツ保育」というネーミングをつけたときから想定され、それに対しては丁寧に説明していく覚悟をしていた。ただ、スポーツ保育が少し広範囲に広まってくると、その誤解に対し説明の機会が与えられるとも限らない。そのような懸念が出てきた折、ちょうど本学で静岡

新聞出版部と協力し「大化けBooks」というシリーズを発行することが決まったため、その第1号として平成26年3月に拙著「運動が体と心の働きを高める スポーツ保育ガイドブック」<sup>(2)</sup>を出版した。この拙著のおかげで「スポーツ保育」とは何かという説明がしやすくなったと同時に、ミリオンセラーにはほど遠いが多くの方に手に取っていただき、「スポーツ保育」を広く知っていただく一助となった。それまでスポーツ保育に関わる講師依頼は静岡県内が中心であったが遠くは金沢市から「スポーツ保育について話を聞かせて欲しい」と依頼が来るようになった。

### Ⅳ. 有資格者の養成

本学が中心となって働きかけて設置した「NPO法人幼少年スポーツ健康育成研究会」認定の資格「スポーツ保育教育士」の養成校として「スポーツ保育」の指導者の養成を2008年の入学生から行っている。認定要件は「本学卒業および所定の科目を修得すること」となっている。「スポーツ保育教育士」の認定に必要な科目群は2018年現在表4の18科目

である。本学でスポーツ保育教育士の取得を目指す学生の多くは、経営学部スポーツ経営学科スポーツ保育コースに所属している。従って、経営、スポーツ経営およびスポーツ科学の学びがベースにあり、その中で表4にあげる様な子どものスポーツに関わる科目と保育系科目を学ぶことになる。ただ運動遊びが楽しく出来るだけでなく、経営やマネジメントの視点から、長期的な視野に立ち運動遊びを継続的に提供できる人材の育成を目指している。

表4. スポーツ保育教育士認定用科目  
Table4. Required subjects for qualification of  
“sports-hoiku-kyouiku-shi”

スポーツ保育1
スポーツ保育2
こどもの身体の発育発達
子どものスポーツ遊び1
子どものスポーツ遊び2
スポーツ保育指導法1
スポーツ保育指導法2
スポーツ保育指導法3
スポーツ保育実習
ジュニアスポーツ実習
認知心理学
発達心理学
リトミック
スポーツⅧ（体操）
保育内容Ⅰ（人間関係）
保育内容Ⅱ（環境）
保育内容Ⅲ（言語）
保育内容Ⅳ（表現）

## V. 講演・講習・シンポジウム

スポーツ保育に関わる講演や講習・シンポジウムなども主催、依頼を含め積極的に行っている。「スポーツ保育」に関連する講習やシンポジウムの代表例を表5と図2・3に示す。

表5. スポーツ保育をテーマとした  
講習・シンポジウム

Table5.Training sessions and symposium on sports child care

1	2008年	NPO法人幼少年スポーツ健康育成研究会発足記念シンポジウム『子どもを元気に育てる「スポーツ保育」の可能性と大人のかかわり』
2	2012年	公開講座「幼児期運動指針解説」
3	2013年	遠州地区私立幼稚園夏季教員全体研修「幼児期に養いたいスポーツアビリティ」
4	2014年	「幼児期に養いたいスポーツアビリティ」
5	2014年	浜松市S保育園「心と体を育むスポーツ保育」
6	2015年	金沢市教育プラザ「スポーツアビリティを高める～よりよい運動遊びを実践するために」
7	2017年	金沢市教育プラザ「幼児期に高めたい8つのスポーツアビリティ」

本学の「スポーツ保育コース」の対象となるのは2008年の入学生であるが、本学は学部入試を行っており、学科・コースの選択をするのは2年生からであり、スポーツ保育コースの設置は2009年からである。スポーツ保育の学びや仕事の環境をサポートするため、本学が中心となり「NPO法人幼少年スポーツ健康育成研究会」を2008年に設置し、その発足を記念してシンポジウム『子どもを元気に育てる「スポーツ保育」の可能性と大人のかかわり』を開催し、元マラソン選手で、現在解説者のM氏をゲストに招き開催した（表5の1）。

その後、「幼児期運動指針解説」をメインテーマとしてスポーツ保育の取組と展望などを含んだ公開講座（表5の2、図2）を開いたり、スポーツ保育のシンポジウム（表5の14、図3）などを開催したりと、幼児教育関係者に理解していただき、スポーツ保育の理解者とスポーツ保育のニーズの掘り起こしに努めて



2012年度 静岡産業大学経営学部 特別公開講座



## 子どもたちの健全な育成のために スポーツが果たす大切な役割。

時代とともに遊びや娯楽が変化し、幼児期に運動・スポーツに触れる機会に限られる中、子どもたちの体力の低下が叫ばれています。今年3月には文部科学省から「幼児期運動指針」が通知され、子どもたちの運動・スポーツを通じた健康育成を呼びかけています。

静岡産業大学では以前から、スポーツと幼少年の健康育成に着目し、日本で唯一「スポーツ保育<sup>®</sup>」を掲げ、子どもたちのスポーツや健康育成について様々な取り組みを行ってきました。

それらの活動の成果を踏まえて、子どもたちの健康で健全な成長のために、運動・スポーツがどのような役割をはたすのかを「幼児期運動指針」策定委員会トップである小林寛道委員長が解説します。

文部科学省「幼児期運動指針」の解説

# 子どもの健康のための 運動・スポーツ

平成24年

# 9.29日

14:30 ~ 16:30 静岡産業大学 経営学部 大講義室 (駐車場あり (学生駐車場))

### 講義1 幼児期運動指針の解説



講師  
**小林 寛道**  
文部科学省幼児期運動指針  
策定委員会委員長  
静岡産業大学客員教授

### 講義2 スポーツ保育<sup>®</sup>の取り組み



講師  
**山田 悟史**  
静岡産業大学講師

お申込 受講料 **1,250円** (受講料は当日会場にてお支払いください。)

①裏面の受講申込書を記入し、FAXまたは郵送  
②裏面の受講申込書を記入し、教務・学生スタッフ窓口に参加  
③静岡産業大学HPの専用申込フォームに入力して送信

締切り 平成24年**9月20日**

募集人員 **100名** (幼児教育関係者・保護者)

受付 静岡産業大学 経営学部  
お問合せ スポーツ教育研究所 公開講座係  
〒438-0043 磐田市大原 1572-1  
TEL. 0538-37-3852  
FAX. 0538-36-8800  
URL [www.ssu.ac.jp/about/course\\_list.html](http://www.ssu.ac.jp/about/course_list.html)

交通アクセス



主催 静岡産業大学 経営学部  
スポーツ教育研究所

共催 静岡産業大学 総合研究所  
NPO 法人幼少年スポーツ健康育成研究会

後援 静岡県教育委員会・磐田市教育委員会  
磐田市

図2. スポーツ保育関連の公開講座案内

Figure2. Information on Extension Lecture of sports child care relation



静岡産業大学

# スポーツ保育 シンポジウム

「あそびとスポーツ保育のススメ」  
運動がからだどころの働きを高める

Photo: 田中雅

平成26年

## 5.17 土

13:00  
15:30

### ホテルセンチュリー静岡

5階センチュリールーム

参加費無料

#### シンポジスト

こばやし かんどう  
**小林 寛道 氏**  
東京大学名誉教授  
文部科学省幼児運動指針策定委員長  
静岡産業大学 客員教授

---

いとう まゆ 氏  
元NHK Eテレ「おかあさんといっしょ」  
4代目ダンスのおねえさん

---

にし お かずたか  
**西尾 和孝 氏** パディ幼稚園 園長

---

かわもり か な こ  
**河森佳奈子 氏** 静岡県健康福祉部こども未来局  
こども未来課 課長




定 員 **250**名 (幼児教育関係者・保護者) 定員になり次第締切ります  
※お子様連れOK。お子様と一緒に休んでいたいただける控室をご用意しています

事前申込 裏面FAX申込書あり

受 付 静岡産業大学 経営学部 (磐田キャンパス)  
お問合せ 〒438-0043 磐田市大原1572-1  
TEL. 0538-37-0191 FAX. 0538-36-8800

シンポジウム詳細は  
静岡産業大学HP INFORMATION「スポーツ保育シンポジウム」

運動が体と心の働きを高める

#### スポーツ保育 ガイドブック

～文部科学省幼児運動指針に沿って～

静岡産業大学  
静岡新聞社

当日販売 1,944円(税込)



主催 静岡産業大学 共催 NPO法人 幼少年スポーツ健康育成研究会

後援 静岡県私立幼稚園振興協会 静岡新聞社 日本発達学会

後援(予定) 静岡県/静岡県教育委員会 静岡県保育所連合会

図3. スポーツ保育シンポジウムの案内  
Figure3. Information on sports child care Symposium

いる。

2014年にスポーツ保育ガイドブックを出版した効果もあり、県外にもスポーツ保育が認知され、金沢市からは2015年から3年連続で幼稚園・保育所の職員研修の講習を依頼されている(表5の6と7)。表5には2016年の掲載がないが、テーマタイトルが「発達の理解と実践〜健康〜」となっており、タイトルの中にスポーツ保育関連ワードがないため、代表例からは省いている。

今後、2018年10月には主任クラスを対象としたチームマネジメント講習、2019年度には保育所や幼稚園の経営者クラスを対象とした経営者講習を、スポーツ保育を基軸に行う予定となっている。

## VI. 市町・企業との連携

### 1. 磐田市との連携

本学経営学部がある磐田市とは、2017年に「磐田元気っ子を育成するための教育・連携協定(以後「元気っ子協定」という)」により、スポーツ保育を含めて互いに子どもの教育について連携し合うことを正式に締結した。この「元気っ子協定」により、磐田市との連携がますます深まり、磐田市の保育士・幼稚園教諭の研修や学生の実習・演習および幼児教育研究などでスポーツ保育を含めて多くの協力・交流が行われている。

### 2. 藤枝市との連携

藤枝市とは2014年の市政60周年記念でのキッズスクールをきっかけに、スポーツ保育で連携して活動している。藤枝市の「れんげじスマイルホール」は子どものための施設である。バレーコート2面分の一般的な大きさの体育館であったが、半面(バレーコート1面分)には常設遊具で遊べる「プレイゾーン」、残り半面は通常の体育館的な機能を残し運動教室等を行う「スポーツゾーン」となっている。元々は高校の体育館であり、高校が移転した後は市の体育館として使用されていた。それを改築し2016年から、いわゆる子ども用体育館として生まれ変わったのであるが、「プレイゾーン」の設置には本学が監修として関わっている。

れんげじスマイルホールの利用は年間7万人の見込であったが、初年度の利用者は14万人を超え、見込の2倍以上となった。この結果は、2017年の自治体相互フェアで上手くいった産学官(ティップネス、静岡産業大学、藤枝市)の事例として藤枝市が発表した。それがきっかけとなり「スポルテック2017」からの講演依頼があり、そちらでは本学が発表した。

また、前項でのべたチームマネジメント講習も2018年に、藤枝市・ティップネスとともにパイロットとして開催する予定であり、その他スポーツ保育に関連して今後も連携して進めていく予定である。

### 3. ティップネスとの協定

株式会社ティップネスとの連携は、前述した藤枝市のれんげじスマイルホールでの取組がきっかけである。れんげじスマイルホール「プレイゾーン」の監修やスタッフ講習、共同研究などを行っている。その共同研究の成果を「こども環境学会」および「子ども学会議の発表大会」で発表している。また同年には、本学と株式会社ティップネスとの間で「スポーツ保育の推進に関する連携協定」を結び、スポーツ保育の発展に協力していくこととなっている。

### 4. その他

2016年に発行された三島市のスポーツ推進計画(4)には、スポーツ保育の普及に努めると明記されている。まだ具体的な連携は行われていないが、今後の連携を模索している。

## 【参考文献】

- (1) 文部科学省幼児期運動指針策定委員会「幼児期運動指針ガイドブック」2012
- (2) 小林寛道、小栗和雄、山田悟史、山本新吾郎「運動が体と心の働きを高める スポーツ保育ガイドブック」静岡新聞社、2014
- (3) 山田悟史、館俊樹、中西健一郎、小澤治夫「保護者参加型のスポーツ遊び教室に対するイメージの変化」スポーツと人間第1巻第1号、pp23-26、2017
- (4) 三島市「三島市スポーツ推進計画」2018